

平和文化研究 第42集 (2022年3月)

切明千枝子さんの思想とその個人史的背景

—講演をより深く読み込むために—

桐谷 多恵子

Cover Artwork: Seiryō Ikawa

長崎総合科学大学
長崎平和文化研究所

切明千枝子さんの思想とその個人史的背景

—講演をより深く読み込むために—

桐谷 多恵子

目次

1. はじめに—本稿の目的と、切明さんと筆者の関係について	35
2. 講演を（ふたたび）読む前に—切明さんの個人史概説	36
3. 講演の内容について	37
4. 切明さんの大切にしているものは何か—その整理と検討	42
5. おわりに	51

1. はじめに—本稿の目的と、切明さんと筆者の関係について

本稿は、本誌本号に掲載されている 2021 年 11 月 20 日に行われた切明千枝子さんの講演を、より深く読み込むためのものであり、切明さんの平和への意識が形成された背景を探る意味付けを持つ論稿である。本稿では、切明さんの講演の内容を追い、その整理を試みつつ、講演内容に関連する切明さんの個人史的背景を紹介する。加えて、講演の内容には含まれていないが、切明さんの思想にとって重要なテーマについても紹介する。

本題に入る前に、なぜ筆者（桐谷）が切明さんの講演の司会と、その記録の解説めいた文章を書くという役割を担うことになったのか、そのことに触れておきたい。筆者は 2003 年から広島の「復興」を主な関心として研究に取り組んでおり、その研究を続けていた 2012 年の秋、切明さんと出会った。筆者が関わったある市民向け講演会を聴きにこられた切明さんに偶然質問を受けたのである。この出会いがきっかけとなり、筆者は彼女に聞き取り調査を依頼し、彼女の戦前・戦中体験や原爆体験、戦後体験について話を聞かせてもらうことになった。以後、2021 年末までの約 10 年間、対面取材で 35 回、聞き取りに応じてもらった¹。「聞き取り」と書いたが、1 回の時間は様々であり、また、親しくなるに連れ、その進め方も形式ばったものから、「対話」とでも呼んだ方が良いようなものに変わって行った面もある（記録も残さない単なる「お喋り」はここには含んでいない）。筆者にとって、切明さんに聞き取りをすることは、研究上重要であるだけでなく、一人の人との対話としてとても心地よい面があった。それが何度もお話を聞かせていただきたいという気持ちを筆者に抱かせた動機であった。ありがたいことにこの 10 年のや

¹ 本稿では桐谷が行った切明さんの聞き取り記録をたびたび出典として使用・引用するが、多用するのは次の 5 回である。①2013 年 11 月 17 日実施、②2014 年 6 月 24 日実施、③2017 年 6 月 16 日実施、④2018 年 10 月 20 日実施、⑤2018 年 12 月 14 日実施。この 5 回については以下、「聞き取り①」「聞き取り②」……と省略して記す。この 5 回以外については、その都度、聞き取り日を示して注記する。

り取りの過程で切明さんからのご信頼もいただき、今回の講演会の司会の役割をいただくことになった。そして、本講演を活字記録として掲載するに当たり、読者の方々がより深く切明さんの諸体験と思想とにふれられるよう、彼女の個人史も踏まえた解説を行う役を担うこととなったのである。

とは言え、筆者が独占的な切明さんの代理人である訳では当然なく、筆者が切明さんの人生を掴み切れていない面も多々あるだろう。切明さんご本人と継続してやり取りをしつつ本稿を執筆しているが、この「解説」は、筆者の責任においてなされる、一つの読み解きであることを、念のため申し添えておく。

以下、本稿は次のように進めたい。①まず切明さんの個人史を簡単に紹介する。②次に講演の内容を整理し、要点を確認する。③そして講演に顕れた切明さんの大切にしている価値や思想について、講演以外に筆者が聞き取った内容も加味しながら検討を加えたい。

2. 講演を（ふたたび）読む前に—切明さんの個人史概説

2-1 煙井家の長女として生まれる

切明千枝子（きりあけ・ちえこ）さんは、1929（昭和4）年11月16日、煙井（たばい）義雄（よしお）と美津（みつ）（旧姓・土井（どい））の長女として、広島市の皆実町（現在の南区）で生まれた。2歳下の妹、8歳下の双子の妹がいる。

切明さんの父方の家系（煙井家）は広島県安佐郡中原村（現・広島市安佐北区）の出身で、江戸時代は煙草の生産もしていたことから、明治に入り煙草の「煙」と井戸の「井」を合わせて名字とした。

父方の祖父は、明治30年代（1900年頃）、村を挙げての出稼ぎが決定されたとき、まとめ役となってハワイに出稼ぎに出たという。切明さんの父は1902（明治35）年、オアフ島で生まれた。ただし、このハワイ行は移民ではなく出稼ぎであった。そのこともあってか祖父は父に「日本で教育を受けさせたい」と、父が5歳の頃、出身の村へと戻ってきた。祖父母は大正期に広島市内に家を建て、そこで暮らすようになった。父は元宇品にある宇品造船所で工場長として働いていた。なお中原村の家は15年戦争末期の台風で流されてしまう（祖父は太平洋戦争開戦直前に病没）²。

一方の母方の家族は土井家と言い、こちらも広島市内の舟入本町（現・中区舟入町）に暮らしていた。母方の祖母は「土井商店」という「雑貨店とブティックを一緒にしたような店」を経営していた。地理的に近いこともあってか小網町の「西遊郭」の遊女たちの化粧品やかんざし等も扱っていたという。母方の祖父は画商で、日本画家の絵を掛け軸に表装し、それを届ける仕事をしていた（なお被爆当時広島にいた土井家の人々は母を除いて原爆で「全滅」し、疎開中で生き延びた祖母は、戦後の一時期、煙井家で共に暮らしていたという）³。

両親が結婚したのは1928年正月であった。

皆実町の煙井家は、広島陸軍被服支廠へ向かう道に面した場所に建っていた。被服支廠へ通う工員たちの足音で朝は目が覚めたという。切明さんの母は結婚後、被服支廠補給部（製造部と補給部に分かれる）の事務所に勤務し、経理の仕事をしていたが、単なる工員ではなく工員を束ねる地位にあったようだ⁴。

² 聞き取り④

³ 聞き取り③

⁴ 聞き取り③。「[母は] 広島市内の山中高等女学校の出身なんですが、当時はなかなか高等女学校出身の人がいなかったんですね。明治生まれの母は、当時は高学歴だったんですね。女は勉強なくていいという時代でございましたからね」、「皆実町の父のところへ嫁いできたら、ばあちゃんが元気で、財布を握っているんですよ。母は「女中にいったようだよ」と言っておりました。ご近所に被服支廠の廠長の方が住んでお

2-2 保育園から専門学校まで

小学校入学以前、切明さんは、被服支廠内にあった保育園・幼稚園（関係者がこどもを預けた）に通っていた。保育園時代は幼かったため記憶がない（幼稚園以降の記憶はある）。

1936（昭和 11）年、皆実町にある皆実尋常高等小学校に入学。こどもの足でも自宅から 15 分ぐらいだった。1942 年 3 月に皆実国民学校を卒業した（1941 年、尋常小学校は国民学校へと改称された）。

同年 4 月、広島県立広島第二高等女学校（以下「第二県女」）に入学。同校は 1941 年 4 月に開校した新しい学校で、広島県立女子専門学校と同じ敷地内（宇品町）にあり、同校の教授が兼任で教えることもあったという。しかし、2 年生になった 1943 年から同校でも学徒動員が始まり、「2 日ごとに軍関係の工場で働き、学校へ戻り、また 2 日間軍関係の仕事で働く」という日常を過ごした（動員学徒にも賃金は支払われていたのだが、直接本人渡される仕組みになっておらず、切明さんは戦後まで賃金が支払われていたことを知らなかった）。広島にある陸軍の三廠（被服支廠、兵器支廠、糧秣支廠）の全てに動員された経験を持つ。1944 年からは広島地方専売局の煙草工場（皆実町）に動員され、1945 年も引き続きここに動員された（1944 年から通年動員になる）。8 月 6 日の被爆の後、9 月から原爆症の症状が現れ、3 か月寝込んだ（被爆体験については後述）。1946 年 3 月、第二県女を卒業した。

1946 年 4 月、被爆の惨禍の経験から医師を目指して大阪女子高等医学専門学校（関西医科大学の前身で大阪府枚方市にあった）に進学するが、食糧難のため栄養失調となり翌月に退学。同年 6 月にあらためて広島県立女子専門学校に入学、1949 年 3 月に同校を卒業した（生活科専攻）。在学中にいくつかのサークルや研究会に出席し、後に夫となる切明悟（さとる）さん（1927-2011）をはじめ、さまざまな人と出会う。この経験はその後の切明さんに大きな影響を与える。

卒業後は広島県教育委員会社会教育課に勤めた。同時期に切明悟さんと結婚。その後、数年は広島県教育委員会に勤めたが、出産と育児を機に退職し、その後は悟さんが立ち上げた教育関係の出版社「東方出版」で働いた（後述）。

1975 年、東京都の中学校教員・江口保氏に請われて、彼の引率で広島にやってきた修学旅行生たちに自らの被爆体験の証言を始める。当時は彼の連れてくる学校生徒に限って自らの体験を話していた。彼女がより広く被爆体験を語り始めるのは、被爆 70 年を前にした 2014 年、広島県被爆者団体協議会（当時、坪井直氏が理事長を務めていた方）で働いていた人物の説得によってであった⁵。その後、2019 年、広島市が委嘱する被爆体験講話の講師となり、被爆体験伝承者制度の教え手も引き受けている。

3. 講演の内容について

3-1 講演の概略

られたんですよ。奥さんと母が仲良くなって、「家の中に奥さんが二人いたら、良くない」と、廠長夫人のご推薦で被服支廠に勤めたみたいです」。

⁵ 筆者が聞き取りを開始したのは 2012 年 11 月からであり、彼女が公に証言をはじめ直前の段階である。そのために、この時期は、言語化の中で体験を想起し、証言を固めていった可能性がある。彼女は、証言を語ることはあっても自ら文章で記してはおらず、彼女の体験が記録になっているのは、彼女が語ったことを他者が文字起こししている記録のみである。例えば、ノーモア・ヒバクシャ継承センター広島編集・発行『切明千枝子 ヒロシマを生き抜いて』（2019 年）、同『切明千枝子 ヒロシマを生き抜いて part2』（2021 年）等がある。

今回の講演は、時系列に即して話されてはおらず、いくつかの話題群を繰り返し語られた。そこで本稿では、それらの話題群（まとめ）に分けて捉え、まとめごとに要点を整理したい（切明さんによる講演と、司会の桐谷が促したことにより追加で語った内容をひとまず対象とする）。

（1）広島と軍隊と戦争

第一のまとめは広島と軍隊と戦争に関わるものである。これはさらに、①広島市の第五師団（広島城に師団司令部）、呉市の鎮守府と海軍工廠、②広島市内の陸軍の三廠、宇品港（動物と戦争）、③こどもと戦争、こどもにとっての戦争、という三つに分けられる。

①について、切明さんは軍隊の問題を広島市に限定せず、広島県に広げて捉えている。広島県は、陸軍の第五師団司令部の所在する広島市（いわゆる「軍都」広島）と、海軍の鎮守府の所在する呉市（「軍港」呉）という、陸海軍二つの重要な軍隊の町を持つ県であった。軍隊と戦争について語られる場合でも広島市に話が限定されがちになることが多い中、切明さんは広島と呉とを共に視野に収めており（実際に呉の話が展開されることはないが）、この両都市はかつて広島県民にとっての「誇り」であったこと、それはいま考えると「背筋がゾッとする」様なことであったという認識が語られる。これが「陸と海で加害の町」だった広島という認識へとつながっている。

②は陸軍と言っても実戦部隊ではなく、軍用品の生産に関わる施設や、兵站に関わる機関の話である。広島市は実戦部隊の基幹的な集団である師団の司令部が広島城内に置かれただけでなく、軍用品の生産を行う大きな施設が三つあった。兵士の軍服等を生産する陸軍被服支廠、兵器生産を行う陸軍兵器支廠、兵士と軍馬等の食糧を生産する陸軍糧秣支廠であり、俗に陸軍の三廠と総称される。宇品港は日清戦争で陸軍部隊を朝鮮半島や中国大陆へと送り出す拠点となり、15年戦争敗戦まで陸軍運輸の拠点であり続けた⁶。これもまた日本の戦争を支えた施設であり、①の認識ともつながってくる。さらに切明さんにとって宇品は日常の生活圏であり、また陸軍の三廠も学徒動員で働いた場所であり、身近な存在としてあった。被服支廠では、「お国のために」との思いで働いていたが、あまりにボロボロの軍服を見て引率の教師に「戦争に勝てるのか」と口に出してしまい大目玉をくらうという体験もしている。このことが彼女の個人史にも影響を与えているだろう。なお宇品港からは兵士だけでなく軍馬、軍用犬、軍鳩も船に乗せられて戦地へと赴いたのだが、動物好きの少女であった切明さんにとって、クレーンで船に積み込まれる軍馬の「哀れな声」は悲痛な思いを呼び起こすものであり、人間以外の命も奪われる戦争の罪悪という思いの淵源はここにある。

③は、このような「軍都」や戦争という状況がこどもに与える影響の話である。これは次節で詳述する。

（2）原爆体験

第二のまとめは切明さんにとっての原爆体験である。原爆体験は幅の広い概念であり、また原爆体験者諸個人による差も大きい。その中で切明さんがとくに語っているのが、①後輩の被爆、②学校での看護と火葬、③核兵器の恐ろしさ、この三点である。

切明さん自身も比治山橋東詰で被爆し、後に原爆症で3か月寝込むのだが、そのことよりも先に語られるのが、①の後輩の被爆である。この場合の後輩とは第二県女の1年生と2年生であり、8月6日には建物疎開作業（防火帯を作るために木造家屋を取り壊した後片付け）として広島市役所の近く（雑魚場町、爆心地から約1km）に動員されて、直接被爆した。被爆して大火傷を負い、皮膚の垂れた状態であった彼女らに切明さんが接したのは、広島地方専売局から避難して戻った第二県女に於いてである。この

⁶ 例えば村上宣昭「陸軍運輸部の誕生」『広島市公文書館紀要』第33号（広島市公文書館、2021年）。

話が②の看護と火葬につながる。切明さんは、第二県女の生徒においては軽傷の部類で、しっかりと動くこともできたため、教師の指示で後輩の看護をすることになるが、薬もなくてんぷら油を塗るのが精一杯であり、また水を求める後輩たちに水を飲ませてあげられなかったことも悔いとして残っているという（実態として不明な点も多いのだが、大火傷の負傷者に水を飲ませると死亡するので、飲ませてはいけないという指導が当時なされていた）。後輩たちの多くはそのまま亡くなった。その後輩たちを学校の隅で茶毘に付すのだが、切明さんはそれを手伝わされている。15歳の少女が大怪我の後輩の手当てをし、さらには火葬にまでする。目の前で後輩の肉体が燃える。これは切明さんの心に大きな傷を残している。③の核兵器の恐ろしさは、まさにこの体験に基づいている。後輩たちが被った、日常ではあり得ないレベルでの身体的負傷は惨いものであり、そのまま死んでしまったこと、そして自分がせざるを得なかった、こどもには（大人にとってもだがこどもにはなおさら）ショックの大きい看護や火葬などの直接の体験が、切明さんの語る「核兵器の恐ろしさ」を実体として構成している。

3-2 切明さんが語る話に出てくる主なテーマ

本節では、これらの語りに切明さんがどのような意味を込めているのか、なぜそれらに意味を見出しているのか、講演の語りを敷衍する形で検討したい。

（1）こども（こどもにとっての戦争の悲惨さ、惨い死に方と惨い経験）

今回の講演の中には「こども」の話が何回も登場する。明確に語っている例では、男の子たちが出征兵士に向かって「兵隊さん、チャンコロやっつけてきてね」という話や、第二県女の女学生たちの死に方に対し「あんなむごい死に方でこどもを死なせたくない」という発言である。

しかし、必ずしも明示的に語られていないが、捉えておきたい点として、切明さん自身が15年戦争の渦中において「こども」であったという点がある。1929（昭和4）年11月生まれの切明さんは、2歳になる1931年に「満州事変」、8歳になる1937年に盧溝橋事件を経験し、15歳で原爆と敗戦を経験している。生まれてから敗戦までの切明さんのこども時代は15年戦争とほぼ重なり合っている。こどもにとっての戦争、その渦中での中国人・朝鮮人に対する差別意識の存在、「お国のために」という国家至上主義、自身の原爆被爆と第二県女の後輩たちの受けた原爆死、そして被爆直後の看護や身近な者の火葬という体験など、「こども」の平和的成長とは懸け離れた環境の中で自分自身が育ったこと、そして戦後、このような国家主義的で軍国主義的な環境とは全く別の環境において「こども」を育てることが可能であるという思想や価値観を得ることで、翻って戦前の「こども」を取り巻く環境の問題を意識するようになったこと（後述）、これらが一つにつながって、切明さんの講演の中での「こども」を巡る語りとなって表出しているのである。この点を踏まえれば、本講演の中で、児童館のこどもたちが作ってくれた粘土のアクセサリーの話が唐突に語られたことも、切明さんの中では自然とつながっていたことを理解できよう。自らのこども時代の社会構造的「不幸」を、今の、そしてこれからのこどもたちに味合わせてはならないという一種の反省もまた、切明さんの語りの中に強く埋め込まれている。

（2）原爆体験の語りの特徴

次に確認すべきはやはり原爆被爆体験であろう。一般に被爆者の語りの中心は原爆被爆体験であるが、被爆者である切明さんにとってその語りはどのような位置を占め、どのような内容が話されるのか。

これまで述べてきたように、切明さんは第二県女4年生の時に比治山橋東詰で被爆し、原爆症で9月から3か月寝込むなど、切明さんも身体的被害も決して軽いものではない。しかし、1945年8月6日当

日に限って言うならば、切明さんの周りは切明さん以上の重傷者であふれていた。切明さんの原爆被爆体験の語りは、自らの負傷よりも、周囲の人びと、とくに第二県女の後輩たちの話が中心になっている。

第二県女の1・2年生は、既述のとおり爆心地から約1kmの雑魚場町（広島市役所付近）で、建物疎開作業に動員されているときに被爆した。彼女らは原爆で怪我や火傷を負い、被爆者の姿として広く知られた「皮膚を垂らした姿」で宇品町の第二県女まで避難してきた。自らも避難して戻っていた切明さんは、学校で傷付いた彼女らを看護する。その姿はまさに「惨い」ものであった。看護と言っても碌な薬品はなく、てんぷら油を皮膚に塗るという、気休めのような行為であった。また、大火傷を負い、各所で火災の発生する広島市内を学校まで歩いてきた疲れも加わり、水を求める後輩たちに対し、「大火傷の負傷者に水を与えると死ぬので、水を与えてはならない」という当時広く流布し、権威者によって規範化されていた指示のため、水を与えることが出来なかった（そして負傷者は水を飲むこと叶わず死んでいく）という、生き延びた多くの被爆者が直面せざるを得なかった悲痛の場面を経験している。負傷者を死ぬに任せるしかないという無力感、そして罪悪感の経験である。

さらにそのようにして死んだ後輩たちは、遺体をそのままにしておく訳に行かず、学校の隅で火葬にせざるを得なかった訳だが、その作業を教師のみならず生徒たちも手伝わされた。校庭に穴を掘り、そこで遺体に油をかけて焼いた。その焼かれる様をずっと見つめていた（この場面については切明さんが描いた絵が1枚ある。この絵は2013年に広島平和記念資料館に寄贈された。「市民が描いた原爆の絵」識別コードSG-0416）。死んでいるにもかかわらず遺体が動き、（これは火葬による反応で、すでに確かに死亡しているのだが）ひょっとして生きているのでは？という思いに駆られたり、遺体が焼却されて骨になるのを目の当たりにしたり、平常時であれば大人の親族でさえ直接見ることもない光景を、15歳の少女が体験しているのである。

切明さんにとって、原爆被爆体験とは、自身の身体的被爆以上に、親しい他者の被爆体験を受け止める体験であった。自身が被爆者であり、被爆体験を伝える立場にあるが、彼女はその前にすでに他者の体験を引き受けるという行為を行っている。自己と他者、二つの面を、切明さんの原爆被爆体験の語りは同時に有しており、それがさらに「下級生の悲惨な死が闇から闇へと消されてなるものか」という思いからの語りとして、継承の行為を生み出しているのである。つまり、切明さんは被爆を体験した者でありながら、死者のために語る〈継承者〉としての側面も有していると言える。

（3）戦前の広島を持つ「加害」性

とくに今回の講演にはその色彩が濃い、他の講演も含め、切明さんは、原爆体験以上に、戦前の広島が持つ「加害」性を積極的に語っている。

一般に広島「軍都」としての性格が語られる際、日清戦争による出撃拠点化と大本営の広島への移動が語られる。切明さんもこの点について触れている。日清戦争自体は切明さん本人の同時代的な体験ではもちろんないが⁷、戦争／平和という問題において戦前の広島という都市（の特徴）を語ろうとするならば、これらの歴史を語ることが不可欠であり、だからこそ切明さんも、戦後に得た知識も加えて「軍都」

⁷ なお日清戦争の同時代体験ではないが、日清戦争とその際の大本営の移動そして天皇の滞在は都市の「栄光」として記念され、その一つとして、明治天皇が臨時国会の際に休憩所として使用した「御便殿」の建物は後に比治山に移築され、記念施設となった。本講演ではふれられていないが、切明さんはこの旧「御便殿」跡に小学生時に拝みに行かされた体験を有している。その意味で切明さんは、日清戦争以後の「軍都」広島の「栄光」を体感して育ったとも言えるだろう。この点は後述の自身の戦前価値観の内在化ともつながってくる。

広島（への批判）を語っているのだと言える。

一方で、15年戦争は自らのこども時代と時期的に重なり、自分自身が内在化させていた戦前的価値（天皇崇拜、国家至上主義、軍国主義、アジア蔑視等）を振り返りつつ、自分の周囲に存在していた戦前的価値の発露に対しても、反省的に振り返っている。本講演では、「軍都」広島、「軍港」呉を擁する広島県が県民の誇りであったこと、自分と同学年の男の子たちが宇品から出征する兵士に向かって「兵隊さん、チャンコロやっつけてきてね」という差別的言辞を、罪悪感なく、声援として送っていたこと、学徒動員された陸軍の三廠で「お国のために」と信じて働いたことなどが語られている。

ここで「軍都」や「加害」という言葉の使い方について確認しておきたい。「軍都」とは、都市類型の一つである「軍事都市」と同様に使用される場合も多いが、それよりもむしろ戦中・戦後史を通じての独特の歴史用語として理解すべき面を持つ。戦中期において「軍都」という言葉は、自らの都市の持つ栄光性を語る言葉であり、戦後とくに広島市では戦前からの転換としての「平和都市」を語るための対比的な言葉として語られた。そしてさらに反戦意識を強く持つ市民からは、戦前の広島を批判するための言葉として見出されてきたのである。

切明さんが「軍都」広島と言うとき、それは厳密な学問的規定に準じて語られているものではなく、15年戦争下、軍国主義下の広島市の歴史体験を全般として批判するために用いられている表現と捉えるのが、妥当性が高いだろう。

「加害」という言葉についても同様の把握の必要がある。「加害」とはこの場合とくに15年戦争における「加害」行為を指すが、ここには少なくとも二つの意味がある。一つは、日本国が全体として行った他国への侵略という「加害」であり、もう一つは、個々の「日本人」（帝国臣民）が個別の他者に対して行った行為である。後者は、戦争犯罪という意味での戦争責任という面からは、主に兵士による殺傷の行為を指しているが、「銃後」にまで範囲を広げた場合には、日本国（大日本帝国）による戦争に自発的あるいは強制的に組み入れられ、戦争遂行に「加担」した行為も含めて語られる。さらには、直接に戦争とのみ関わる話ではなく、朝鮮人（帝国臣民とさせられた）に対する個別の侮蔑的・差別的言動も、この言葉の広い範疇において（切明さんの中では）語られている。

「軍都」という言葉と同じく「加害」という言葉も、厳密な規定の下で使用されている言葉ではなく、このような15年戦争体験を全体として反省的に捉えるための言葉として、切明さんは使用していると捉えるのが妥当であろう。

「軍都」も「加害」も、切明さん自身が15年戦争下で捕われていた戦前的諸価値を反省的に捉え返し、戦後に得た平和的・民主主義的・進歩的な諸価値を内面化し、また社会的にも推し進めるために用いられている言葉として把握することが、切明さんの語りに即してその意味を捉えることになるだろう。

（4）核兵器廃絶、戦争をしてはいけない、平和の危機

切明さんの講演の最後のまとまりは、現在の世界において核兵器を廃絶することの重要性や戦争をしてはいけないという決意、そしていま訪れている「平和」の危機に関する内容である。切明さんが自らの戦争体験や原爆体験を話すのは、目的としてはここへとつながっている。

核兵器がいかなる悲惨を惹き起こすかは、切明さんにとっては実体験であり、その面から（被害の面から）核兵器は使用されてはいけないものである。しかしそれだけでなく、「あると使いたくなるのが人情」という使う側の心理や論理への言及もあり、そのためには核兵器は単に使用禁止ではなく廃絶こそが使われない／使わせないために必要であると捉えている。そして、いまは一面では「平和」とであると捉えつ

つも、このような状態になってこそ初めて「本当の平和」と言えるということも示唆している。

切明さんの訴えるのは核兵器の問題だけではない。彼女の話には戦争全般への批判が強い。前述したこどもたちにとっての戦争の問題や、動物の命までも奪うものとしての戦争への批判は、繰り返し講演の中で語られる。

そして、このような語りの背景には、とくに日本国内での「平和」への危機感がある。日本国憲法第9条の存在に対し、あらためて戦争のできる国にしたいと考える政治家の存在など、「再びの軍国主義時代のような日本になる」ことへの恐怖感を持ち、「戦争が廊下の奥に立つてゐた」（渡辺白泉の俳句、1939年）という状況が再びやってきているのではないかという危機感を持っている。これに対し戦争を批判し、平和の擁護を訴えるのだが、この点で切明さんの発言は、聞き手への一方的なお願いではない点に特徴がある。いくつか発言を追ってみよう——「もう二度と戦争なんかあつてはならないぞと思う」、「あの子たち〔粘土のアクセサリを作ってくれた児童館のこども〕を戦争に送ってなるものか」、「みんなでしっかり平和を捕まえておかないと、〔平和は〕すぐどこかへ飛んで行ってしまう」、「広島悲劇、長崎の悲劇が再び繰り返されることがありませんように、一生懸命力を合わせて必死で平和を守っていきましょう。それが戦争で生き延びさせてもらった私たちのやらなければならない務めだと、私は今、心の底からそう思っております」、……。これらの発言は、もちろん聞き手への呼びかけではあるのだが、それ以前に自身の決意である。自身の体験を語り、それを聞き手たちに引き継いでほしいとただ投げかけるのではなく、あくまで自身の戦争体験・原爆体験を基とし、さらに戦後の諸活動から得た知識と信条により、自らの責任においてなすべき行動として、現代日本への批判として戦争批判と平和を訴える活動を行っているのである。

4. 切明さんの大切にしているものは何か—その整理と検討

以上、3までで切明さんの講演の主要なポイントはひとまず示せたと思う。しかし、切明さんの思想とその背景を知るためには、講演では語られなかった部分にも重要なことがある。本章では、講演では比重の少なかった切明さん自身の被爆体験を、これまでの聞き取りを踏まえて補足するとともに、「軍都」広島や戦争について批判的な視点を切明さんが獲得して行った戦後の諸活動について桐谷自身の聞き取り記録より紹介し、検討する。

4-1 切明さん自身の原爆被爆体験

切明さんは、講演では、原爆被爆体験のうち自身の被爆そのものよりも後輩の被爆とその看護や火葬等について重きを置いて語った。このことは、切明さん自身にとって後輩たちへの応答が、自身がまず引き受けるべき責任であることを示している。それは一つの誠意ある態度であり、敬意を表すべき点であるが、切明さん自身の被爆体験もまた伝えられ、残されるべきものである。その趣旨に即して、本節では切明さん自身の被爆体験を補足しておく。

（1）被爆当日から直後にかけて

1945（昭和20）年8月、切明さんは学徒動員で皆実町の広島地方専売局（煙草工場）で働いていた。6日は、足を痛めていたので、朝礼に参加してその後病院（当時、宝町に仮の診療所を開設していた久保田医院）へ向かった。比治山橋東詰から橋を渡ろうとしたが、足が痛く、少し休もうと橋のたもとの小さな木造の建物に立ち寄り、汗をぬぐったところで、目もくらむような閃光が背後から放たれた。その直後に

何かに叩きつけられて気絶した。強烈な爆風であった。爆心地から 1.9km の距離であった。どれほど時間が経ったのか、気がついた時は建物の下敷きになっていたという。倒壊した建物から自力で這い出たところ、辺りは真っ暗であり、風景が一変していた。しばらくすると橋の向こう側の街が火の海となっていた。そこから人びとが叫び声をあげて逃げてきた。「この世の地獄絵をみているよう」であったという。その後、煙草工場に戻ることにして向かったが、道路がなくなっていた。家も倒壊し、街の景色が変貌していたが、何とか煙草工場へたどりつくことができた⁸。

煙草工場は火災を免れていたが、大きく崩壊していた。建物の中から級友が這い出てきて「助けて」と救出を求めた。切明さんと彼女は自分たちの学校（第二県女）に向かうことに決め、切明さんは重傷の級友に肩を貸して、背負うようにして学校を目指した。校舎に入ると校長や煙草工場にいた教員、そして 5、6 名の級友がおり、皆で無事を喜び合った。昼過ぎになると続々と下級生たちが学校へ戻ってきた。顔に大火傷を負い、腫れ上がって、誰が誰か識別できない。学校にいる人たちで救護にあたった。畳敷きの作法教室を救護所として使用したが、間もなく負傷者で溢れた。物理化学教室の机をベッド代わりに寝かせたが、ここも負傷者で埋まり、廊下に寝かせていった。治療といっても、救急袋に入っている火傷用の油薬はすぐになくなり、調理用の天ぷら油を探しだして患部に塗っていった。被爆した人を収容しきれなくなると運動場の木陰に寝かせていった。そのうちに、ひとりまたひとりと「おかあちゃん、痛いよ、助けて」と泣きながら、亡くなっていった。夏の暑い時期なので放っておけないと、教員の指示で、人間が一人よこたわれるくらいの浅い穴を掘り、集めた材木を下に敷き、遺体を乗せて、陸軍船舶部隊に動員されていた下級生がもらってきた油を入れて火をつけた。「人間が焼けて、骨になるまでの悲惨な状態は言葉にできません。胃や腸が破裂するパンパンパンと [いう] 大きな音がして、手足も動くのです。私がびっくり仰天していると先生から「見るな！」と言われました」。しかし、身体が金縛りのようになって目を背けることができず、一部始終を目撃してしまった。綺麗な遺骨が残っていることが確認できたとき、「金縛りが解けて」、涙がボロボロと出てきた。泣きながら、遺骨を拾い、名前と亡くなった日付を書いて、校長室の大きな机に並べていった。次から次へと並べていったという。しばらくして、亡くなった生徒の親が捜しに学校までたどり着き、我が子が骨になっているのを見て泣く。廊下の陰に隠れて、切明さんたち生き延びた生徒も泣いた。「見てはいけないものを見てしまった悲しみと言いましょ。膨大な悲しみに溢れていました」。

6 日の午後、学校から自宅へ戻ると「家がめちゃくちゃに崩れていた」。「最初は野宿ですよ！よその家の畑に、4 本の柱を立てて、そこに蚊帳を吊って、地面に畳を敷いて寝ていました。その畳も、表面にはガラスがいっぱい刺さっていたので、畳を裏返して地面に敷いていたんですよ」⁹。

（2）原爆症の発症と回復（1945 年 9 月から年末にかけて）

原爆被爆から 1 か月が過ぎた 1945 年 9 月、切明さんの体調は著しく悪くなった。まず髪が抜け始め、歯茎からの出血、血便が出て、身体に紫色の斑点が表れ、高熱に苦しめられた。そして、身体の不調と共に精神的にも追い詰められていった。あの時、「なぜ自分は生き残ってしまったのか。友人や下級生とともに死ななかったのか。生き残るよりも皆と死んだほうが良かったのではないか」。「身内も友人もたくさん死んでますからね……。どうして私はあの人たちと一緒に死ななかったんだろうと、戦後、茫然自失でね。うしろめたさみたいなものに、さいなまれる」。身体と精神の両方から生きる意欲を奪われていっ

⁸ 聞き取り①

⁹ 聞き取り①

た。その時の心情を彼女は次のように語った。「正直なところ、原爆症が出たときには、ホッとしたような気持ちでした。「死ねば楽になれる」と思っていたんです」¹⁰。

そんな彼女を死の淵から救い出したのは両親であった。病床時の記憶は明確ではないが、両親は必至に看病をしてくれた。特に母は、「死んではいかん」と言い、原爆症に効くと云われていた鯉の生き血やドクダミ草を煎じて飲む等のあらゆる民間療法を切明さんに試みた。必死に「生きよ、生きよ」と語りかけた。重篤な状態は3か月続いたが、献身的な看病もあって彼女の体調は次第に回復していき、気力も取り戻していった。「私には看病してくれる家族の存在がありましたので助かりました。しかし、そういう手当てのない人びとは次々と亡くなっていきました。弱い者、貧しい者が真っ先に、戦争の犠牲になるんですね。もっとしっかりした救援があれば、助かる命があったと思います。自力で生き延びるしかありませんでした」¹¹。

しかし、切明さんは自身の被爆体験を講演で語ることは多くない。我々から見れば彼女も重篤な原爆被害を受けているのだが、彼女自身は自分より「惨い死に方」をした下級生たちの話を伝えることに意識が向いている。非人間的に殺されていった、そして、供養もされずに焼かれて、その場に遺骨を埋められていた死者たちの姿に何よりも心を痛めている。原爆に焼かれ、熱線と爆風で無惨な大怪我を負った後輩たちの「地獄絵」が頭から離れず、「被爆体験を思い出すことがとても怖かったんです」。1970年代半ば、東京からきた修学旅行生に話をして欲しいと頼まれた際には「とてもできないと思いました。断って断ってね……」、「もう、考えるだけで、恐ろしくて、苦しい気持ちになるんですよ。話せるようになったのは、本当におばあさんになってからですよ。あの人たちのことが闇から闇へと消えて、なかったことにされたんじゃないかなという気持ちでね、なんとか話し出したんですよ」¹²。

死者（無惨な死に方をした親しき者たち）のために語るのだ、という気持ちが切明さんの被爆証言の原点には存在している。

（3）「空白の10年」と契機としての被爆30年

広島では戦後の10年間をしばしば「空白の10年」と呼ぶ。被爆者が声を挙げられず、援護も手が付けられなかった空白期といった意味だ。切明さんもたびたびこの言葉を口にする。占領下で原爆被害の報道が制限されたが、もし国内外の人びとに原爆の悲惨さや被爆者が苦しんでいる姿が広く伝えられれば「救えた命もあったのではないか」と思っている。「戦後10年間は、原爆のことなんかはね、話にも出たこともないし。被爆者の救援なんかもでたことないですし。あれは、なんだったんでしょうね。みんな、食うや食わずで、大変なのに、「これからは民主主義だ」っていうような話ばかりが叫ばれておりましたね」、「身内でも、原爆の話はあんまり、しなかったですね。学校へ行ってもね、原爆でどうこうあったとか、原爆で酷い目にあったとか、身内の誰だれが死んだとか、っていう話は、一切、出ませんでしたね！　今考えてみたら、不思議なんですけど。アンタッチャブルだったですね。触れてはいけないことだった。だから、私ね、高等女学校4年生のときに、被爆してその次の年に卒業して、女子専門学校に行くんですけど、女子専門学校に行って、原爆で誰が彼が亡くなったとか、やられたとか、そういう話はね、生徒の間で、一切、なかったですね！」、「誰も聞きもしないし。ほんとに、そういう意味でも「空白の10年」だったかなと思いますね」¹³。

¹⁰ 聞き取り①

¹¹ 聞き取り①

¹² 聞き取り③

¹³ 聞き取り④

それでは、切明さんはいつ頃から被爆体験を話すことができるようになったのか。これに対して彼女は、被爆から30年ほど経って、東京から修学旅行で生徒たちが広島に来るようになり、引率の先生（江口保氏）から被爆体験を話してほしいと求められるようになってから話すようになったと述べる。しかも、「苦しみながらも語るようになった」と。「それまでは、ほんとに皆、私なんかでも数えてみたら、69人[の]親戚身内は亡くなっているわけですけど、そういう話をしたこと[被爆体験を人に向かって話すということ]はないですね」、(精神的なダメージがあったのかと問う筆者に)「確かに、精神的なダメージもありましたね。でも、それよりも、それを話して聞かせてくれ、という人もいなかったですからね。体験者同士は、お互いに触れてはいけない生傷みたいなものを抱えていますからね。触れると、血を噴きますからね。血を噴くんですよ。ですから、アンタッチャブルでしたね」¹⁴。

体験を「聞かせてくれ」と求める人の存在によって初めて「語る」契機が生まれた、というのは重要な点である。いわゆる「継承」の議論においては、概して「語る」体験者の存在に重きが置かれるが、聞かせて欲しいと「求める」側の存在がなければ、伝承／継承という関係は成立しない。切明さんの場合にも、まさにこの点が重要なポイントであった。

4-2 戦後の諸活動と戦中からの意識変革

本節では、「軍都」広島や戦争について批判的な視点を切明さんが獲得して行った戦後の諸活動について紹介、検討する。

(1) 「敗戦」体験

「軍国少女」であったという切明さんが敗戦をどのように受け止めたのか、そして「戦後」はどのように始まったのだろうか。

1945（昭和20）年8月15日は動員はなく、学校に出ていた。「玉音放送」はそこで耳にしたのだが、「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」の箇所しか聞き取ることができず、戦争に負けたとの受け止めはなかった。教員が「負けた、負けたんだよ」と説明しても受け止めきれず、みんなで先生に詰め寄ったという。「あんなに酷い目にあってから[あったというのに]、何のために命を奪われたんよ！」と怒りが込み上げてきたという（このような発言は彼女以外にもしばしば見られる。被害を受けたその時ではなく、無理やりにでも受容したその被害の価値が、自分たちの与り知らぬ場所で勝手に無に帰されたのである）。一方で、その悔しい思いとは裏腹に、夜中の空襲警報でおびえることがなくなり、命を狙われる不安もなく、「生きていける」という安堵もあった。悔しさ、安堵、そしてなんとも言えない空虚感があったという。「あの時の自分の気持ちは、複雑怪奇であり、カオスでありました」¹⁵。

しかし、しばらくすると「敗戦の暗さだけではない、明るさといいますか、光が見えたような気持ちもありました」。それは、軍国主義時代とは真逆の「新しい世界に対する喜びと驚き」だった。戦中という「真っ暗」な「暗黒の時代」に対する「さらば、軍国主義」という思いと、「新しい日本を作るのは、自分たちだ」という「希望に満ちた」思いが、戦後の比較的早い段階から切明さんの中に芽生えていた¹⁶（勝手に価値を無に帰されないために自分たち自身がその判断の権利を持つこと。つまり民主主義の課題であるとも取れる）。

¹⁴ 聞き取り④

¹⁵ 聞き取り③

¹⁶ 聞き取り③

（2）広島県立女子専門学校時代のサークル活動を通じた出会い

戦後は「何か社会のためにしないではおられなかった」という。「命が助かった者の務めのような思いで皆が自分にできることに務めていましたね」。また「新しい世の中がやってくる」中で「あまりに酷い、廃墟になった焼け跡の中で「何かに縋りつきたい」という思いもありましたね」¹⁷。

1946年、大阪女子高等医学専門学校を体調不良のため退学した後、切明さんは皆実町にあった広島県立女子専門学校に入学し、そこで彼女は様々なサークル活動に参加した。

最初に参加したのは児童文化研究会であった。上級生の菊池み津子さんが主導したサークルで、主な活動は「原爆孤児」たちの支援活動だった。紙芝居や絵本を読み聞かせたり、「原爆浮浪児」といわれていたこどもたちに生活の場を与える「新生学園」に通い、幼い孤児たちに添い寝をしたり、学生にできる形で生活を支援した。次いで、海外同胞救出学生同盟に参加した。これは広島高等師範学校や旧制広島高等学校の学生・生徒が中心となって立ち上げた団体で、「引揚げ船が宇品に着くと迎えに行ったり、お茶のサービスをしてあげたり、それから煎り豆だの、芋飴だの……、みんなの小遣い少しずつ集めて買って、飴を一粒ずつお配りしたり」する活動だったという。この他にも、社会科学研究会に参加していた。この時期、社会科学研究会はいくつかの学校に成立しており、学校間をつなぐ連合会が出来ていた。生涯の伴侶となる切明悟さんと出会ったのもこのサークルである¹⁸。

しかし最も重要な影響を与えたのは、広島県労働文化協会の活動であった。戦前に『世界文化』や『土曜日』といった反ファシズム雑誌の活動に参加し、戦中は活動を制約されていた美学者・社会運動家の中井正一は、戦後、尾道を拠点に活動していた。彼は広島で夏期学校を開くため1946年から頻繁に広島市を訪れ、4年ほど夏期学校が開催された。当時、広島高等師範学校の学生だった悟さんは「中井先生にかわいがられて」、中井が立ち上げた広島県労働文化協会の広島市内での事務局を担っていた。切明さんも悟さんを通して労働文化協会に参加した。「はじっこの方で私はお手伝いをさせてもらっているうちに、[戦前の]「自分はなんてことをしたんだろう」と思ったわけですよ。[こども時代とは言え]「万歳、万歳、支那兵をやっつけて来て下さい」みたいなことをくちばしったりしていたわけですから。背中がぞくぞくするくらい恐ろしいことを自分が考えていたっていうことに気が付いたんですよ。労働文化協会では、中井正一の他に山代巴、峠三吉、大村英幸といった戦中からの「反戦主義者、平和主義者」と関わりを持つことになった。そのことで、自らの戦中の意識の恐ろしさに気が付き、戦争の「加害」という問題について認識していったという。「中井正一さん、切明悟さんを通して、大村英幸さん、峠三吉さんと親しくなりましたしね、山代巴さんにもなんべんもお会いしてお話しましたしね、その方々と話して関わっていくうちに、待てよ、広島がこんな酷い目にあったと思っているけど、それに相応するような、加害者であった日本というものを、ほんとに、痛烈に思ったんですよ。だから、そのことの反省抜きに、平和はないなというのに気が付いたといえますか。戦後の活動を通して、ですよ、」「それは、ほんとに180度の思想転換でございましたよ」、「戦争中の軍国主義とは真反対の考えをお持ちの人たちとの関わりが大きかったんですよ。そういう思想のひとたちがいたのか！と大変にショックも受けましたね。自分のそれまでの人生ではなかなか関わることでできなかった思想ですからね。頭の上から足の先まで軍国少女であったなと思い知らされたわけですよ。ですから、戦後なんですよ」、「私は、原爆のとき、15歳

¹⁷ 聞き取り③

¹⁸ 聞き取り③

ですからね、こどもと大人の間には育っていたわけで、一丁前に、生意気に、「天皇陛下のため」「お国のため」と考えていたわけですよ。天皇と国のために命を捧げることが最も立派な、日本人のあるべき姿だと信じ込んでいたわけですから。それを信じ込まされたという悔しさ、残念さと言いますか、悲しさと言いますか。自分自身に対する怒りというか。なんとも言えないショックですね。反戦主義とか自由主義とかいう思想があったことすら知らなかったんですからね」¹⁹。

敗戦直後の両義的な立ち位置から、サークル活動を通じて明確な戦前・戦中の自分への反省へ。戦後直後の数年間は切明さんのその後の思想的基盤の形成において、極めて大きな位置を占める時期であった。

（3）広島県教育委員会時代—アメリカの民主主義について

一、広島県教育委員会社会教育課時代

広島女専を19歳で卒業した切明さんは1949年4月、広島県教育委員会社会教育課に勤めることになった。占領改革の最中であって、民主的な社会教育の促進を図ることを職務とする社会教育課は、「もう全体がね、そういうアメリカの考える民主主義を広めるという大きな命題があったわけだね。そのミッションを担っていましたね」、「封建的な日本を解体して、民主的な日本を作らないといけないというミッションがあったわけですよ。それを一般の市民たちに植え付けるとというのが戦後の教育委員会社会教育課の仕事だったんですよ。私は、もうね、まだ二十歳そこそこの小娘が、田舎の方の婦人会、愛国婦人会とか国防婦人会とかありましたよね。そこの会長さんというのは、地元の名士の奥さんとかお寺さんのご住職の奥さんとかが会長で、戦後もその流れが続いているわけですよ。それを解体して、それで村の女性の人たちがみんな自分たちで選挙して会長を選ぶという、いわゆる偉い地主や村長の奥さんが会長になるのではなく、封建的なやり方を解体して、新しく民主的な婦人会を作りなさい、と。会長は、選挙でえらばなきゃいけない、という民主的な団体に組み替えろという一大ミッションがあったわけですよ。そこを私は仰せつかって二十歳そこそこの小娘が広島県の農村を歩きまわりましたね。みんなの選挙で選びましょうなんて言ってまわるわけですよ。偉そうに……。この仕事はきつかったですねー」。

女性の解放やこどもの人権が重要な課題として掲げられていた占領改革について、「それは、正しい改革だと思いました」。戦前に当時としては高学歴だった母親が家庭の中ではその資質を発揮できなかったこと、切明さん自身、勉学に励みたかったにもかかわらず、最初から高等教育への進学が閉ざされていたことなど、「悔しかった」思いが背景にあった。それが、アメリカの進める民主主義政策の下で、権利において男女は平等となった。この点について切明さんはアメリカの改革に「感謝して」いる²⁰。

一方で、「今考えてみたら、アメリカ占領軍の手先になっていた。手先にされていましたよね。私は、一番、下っ端なだけ」という複雑な思いも同時に抱えていた。彼女は毎週、「どんな仕事したか、どここの婦人会へ行ってどういう風に変えたか、民主的に変えたか」という「レポート」（報告書）を県教育委員会総務課に提出していた。総務課には日系2世のアメリカ人通訳がおり、彼女のものも含め日本語のレポートを英訳していた。この報告書は呉の進駐軍のオフィスに送付されていたという²¹。この作

¹⁹ 2022年1月27日、筆者による切明さんへの電話インタビュー。切明さんに許可を得て、電話の音声を録音し、文字起こしした記録より。

²⁰ 聞き取り④

²¹ 広島市内には占領軍の拠点はなく、中国地方の拠点は呉に置かれていた。中国・四国地方は1946年からは、オーストラリアを中心とした英連邦軍がアメリカ軍と入れ替わりで進駐してきたが、同軍は治安等の担当を引き継ぎ、軍政に関してはGHQが所管し続けた（千田武志『英連邦軍の日本進駐と展開』御茶の水書房、1997年、39-42頁、及び荒敬『日本占領史研究序説』柏書房、1994年、112頁）。「アメリカの下で」という切明さんの感覚はここにも由来するだろう。

業は切明さんに「アメリカの下で働いている」という意識を植え付けていた²²。

このことは、社会科学研究会や広島県労働文化協会の活動で知り合っていた山代巴との思わぬ再会によって強く刺激されることになる。1950年ごろ、切明さんは広島市内のとある場所で山代と偶然再会した。そのとき山代は切明さんに対し、「あなたがやっている仕事は悪くないと思う。封建的なものを解体して、みんなの選挙で選ばなきゃいけないよってというのは、大賛成で、だけど、でも、それは、役所がいうことじゃないでしょ」、「あんたは、お役人だ、と。役人の鎧を着て、兜かぶって、いくら民主的にやれやれと言ったって、これはほんとの民主ではないよ」と、「がちんとやられた」のである。「私もその時に「そうだ」と思ったわけですよ。それでね、山代さんとしばらく話をして、やっぱり、この人が言うのが本当だわって。やっぱりお上が言って民主的になれ、なれ、と言ってなったんでは、ほんとに民主的でないよなあ、という思いが非常にしましたね。自分は何をやってるんだろうと思ってね、なんだかとても虚しくなってる。山代さんに、がちんとやられましたよ。まだ若かったですからね、自己が確立してないんですよ。だからね、ふらふらしてね。駐留軍の命令で動くんですけど、民主的にしても、ほんとにこれは民主的と言うのだろうか、となるんですよ、山代さんに言われてから。「まてよ、これ、やっぱり変だわ」と思い始めるわけですよ。それでね、ほんとにね、心の中でいろんな葛藤がありましたね」。山代との再会は、本当の「民主」「民主化」とは何かについて、彼女に強く再考を促した。しかし、その一方で、「食べていくために仕事をやめるわけにはいかなかった」。彼女は自問自答しながら社会教育課で働き続ける。「アメリカのやり方がおかしいなんて言ったら、即、首になるだろうし、即、引っ張られるでしょうからね……。それにね、自分が取り組んでいることは、たとえ占領軍の至上命令だとしても、民主主義ですし、男女平等だし、女性に参政権を与えよ、とか、私は素晴らしいことだと思ったんですよ。女性にとっては、足枷が外されて、これからは女性も男性と同じレベルで色々と社会的な活動ができるようになるという希望のようなものもあったんですよ。……だけど、心の中は複雑でしたね。随分と葛藤していたと思います」²³。

二、広島県児童図書館への異動から退職まで

1951年11月、広島県児童図書館が開設された²⁴。その経緯は次のとおりである。広島市内の印刷会社・広島図書（当時、児童向け雑誌『ぎんのすず』を発行）が、1950年3月に兵庫県西宮市で開催された「アメリカ博覧会」²⁵に、「アメリカのこども図書館のようなモデルの建物を出展」し、建物や本箱、机、椅子が製作された。広島図書は博覧会終了後、これらを広島県に寄付した。これがアメリカ文化センター（旧CIE図書館）近くの空き地に運ばれ、広島県児童図書館（県児童図書館）が開設することとなった。

切明さんは、上司から「誰か行かんか」と呼びかけられたとき、「一番に手を挙げて、「行かせてください」と志願した²⁶。志願した理由は、まず本が好きであったことと、こどもに接したいという思いがあったことである。また、20代前半の自分が年配のご婦人相手に民主主義の指導をするのが精神的にきつい面もあったという。さらに魅力的だったのが、司書の資格も取れるという点であった。開館と同時に彼

²² 聞き取り④

²³ 聞き取り⑤

²⁴ なお、この前の1949年、広島市の児童図書館が丹下健三の設計で基町に開設されている。

²⁵ 西宮市ウェブサイト「【西宮北口】戦後初の本格的博覧会 アメリカ博（昭和25年3月）」（更新日2022年1月25日、最終閲覧2022年2月22日）

<https://www.nishi.or.jp/bunka/rekishitobunkazai/mukashipfoto/amerikahaku.html>

²⁶ 聞き取り⑤

女は県児童図書館へ異動になった。「まだ大人の図書館もなんにもないときに、子供の図書館ができた（笑）。原爆投下前の広島には、市中心部に市立浅野図書館があったが、原爆で壊滅的な被害を受けていた。県児童図書館で働き始めて、「びっくりしましたね。アメリカはこどもの人権を大事にする国なんですね。こどものために素晴らしい施設を用意してくれるわけですよ。椅子とか机もこども用で。浅野図書館にも児童室というのはあったんですよ。それは、ほんの申し訳程度に図書館の片隅にちょこっとあるぐらいのものでね。[県] 児童図書館ができてからは、こどもたちがたくさん来てね。本当にうれしそうですね。アメリカのこどもへの意識というか、すごいと思うわけですよ。私は、こどもに人権があるなんて考えたこともなかったと思いますよ。こどもは大人の付属物。大人の所有物で、大人のいうことをよく聞いて、従う、という。でも、アメリカの教育では全然違うじゃないですか。だからね、西洋のこどもは『トム・ソーヤの冒険』とか翻訳本が来るわけですよ、そうすると、こどもはイキイキと活動しているじゃないですか。大人の付属物ではなく。あれには、びっくりでしたね。やっぱりね。随分と教育が違うなと思いましたね」²⁷。

切明さんは、このような児童図書館の勤務経験から、アメリカ的なこどもの権利の思想に強く触れることになる。このことは、戦時下日本においてこどもの権利が侵害されていたという事実（侵害されていたとすら思わなかった）を認識し、軍国主義時代の教育の恐ろしさとこどもへのその影響を痛感する契機となった。

1954 年 4 月、新たに広島県立図書館が開設され、県児童図書館はその中に吸収された。県児童図書館の解体と同時に切明さんは再び広島県教育委員会社会教育課へ戻った。

切明さんは、切明悟さんとの結婚（1949 年 6 月）後も県教育委員会で働いていたが、1956 年に長女を出産し、育児の都合もあって、1957 年、退職した。

20 歳そこそこの切明さんにとって、広島県教育委員会の勤務経験は、アメリカの民主主義とくに女性やこどもの権利についてのそれを、強く実感するものであった。「民主主義なんて、どういうものか知らなかったわけですからね。そういう考えがあることも知らなかったわけですし。軍国主義、皇国主義、一本ですからね。天地がひっくり返ったくらいの大変な出来事でしたね」。山代巴との再会による刺激などもあり、アメリカの民主主義や教育委員会という「上から」の「役所」の仕事を全面的に肯定できた訳ではなかったが、それでも彼女はそれらに対し、戦前を批判的に捉え、社会を変革するための相応の役割を見出した。県教育委員会時代の経験は、その価値を実践的に身に付ける過程でもあったのである。

（4）教育図書の出版社「東方出版」

1956 年、切明悟さんが、教育関係の図書を中心に刊行する「株式会社 東方出版」（以下、東方出版）を立ち上げた。長女に続き長男が誕生する中、県教育員会を退職した切明さんは夫の仕事を手伝った。「教育っていうのは、ものすごく大事ですね。恐ろしいぐらいですね。だからね、ほんとに教育というのは怖いなあというのがね、戦後にね、身に染みて思いましたね。私の夫もそうだったと思うんですよ。教育というのがほんとに大事だということが骨身にしみていたと思うんですね。今までの教育を変えなきゃいけないという、そういうスタンスで出版社を立ち上げましたしね。新しい教育とは何かというのを考えて、広めていくというのが大事だと言っておりました。それで、教科書的な本を出し続けるわけす

²⁷ 2022 年 1 月 27 日、筆者による切明さんへの電話インタビュー。切明さんに許可を得て、電話の音声を録音し、文字起こしした記録より。

からね。[夫は] これまでの教育をかえなきゃいけないと叫び続けていました」²⁸。

悟さんは、「学校教育から社会教育から、全部変えていかなきゃだめだ」という問題意識を持っており、「新しい教育理論というんですか、それを構築しようというので、それで学習集団作り」というのを始めたという。「私たちは、戦争に行って、天皇や国を守るために命を捨てよ、と教育を受けてきました。再び、戦争を起こさないためにはどうするべきかを考えると、やっぱり教育が大事なんですよ。戦争なんかで死んではいけないよ、と伝えていくためにはどうするのか。平和に生きていくとはどういうことか。平和というのは、座っていて、向こうからやってくるものじゃないですからね。ぼやっと黙って座っているうちに、どんどん戦争の方へ連れて行かれてしまうんですよ。だから、平和を守るためには、教育が非常に重要なんですよ」²⁹。

自分たちが受けてきた軍国主義の「教育」（正確には「教化」と言うべきか）では「天皇や国を守るために命を捨てよ」と育てられており、今後も現れるであろうそのような「教育」に、親も子ども自身も抗うために、平和・反戦の教育をしっかりと行う必要性を認識していた。さらに課題は反戦教育にとどまらず、「戦争と共に差別についても考えることが重要」と悟さんと頻繁に話していたという。そして、部落問題（同和問題）などの差別問題についての図書出版にも力を入れた。平和に関する議論において広島では「核廃絶」に集中する傾向が強いが、平和の思想はそれにとどまってはならないと切明さんは言う。「本当の平和って、核兵器をなくすということだけではなく、差別もなくす、ということが大事なんですよ。夫もよく言っていました。「差別がある限りは、どんな教育理論を振り回して教育したってね、本当の教育じゃないぞ」って」³⁰。

東方出版の活動を通じて、切明さんは、夫の悟さんと共に、反戦と平和をめぐる認識を深めて行った。

なお、1960年代後半から1970年代前半にかけて、原爆被災資料広島研究会の事務局が東方出版（当時、上八丁堀）に置かれ、切明さんは悟さんと共に『原爆被災資料総目録』³¹の刊行に携わった。同書は広島に散在している原爆関連資料がどこに所蔵されているのか、「戸籍謄本を作るような試み」として、広島に学者・文化人・活動家（今堀誠二、大牟田稔、金井利博、庄野直美、田淵実夫、田原伯、文沢隆一、深堀宗俊、平岡敬、山崎与三郎、横田工ら）によって取り組まれた³²。切明さんは編纂作業を「大変な作業」であったと回顧しつつ、「原爆被災の記録を次世代に残す」重要な作業であったと振り返っている³³。

本章では、軍国少女であった切明さんが如何にして「軍都」広島や戦争を批判する視点を獲得することができたのか、彼女の戦後の諸活動を追いかけ、検討することで明らかにしようとした。本章の検討から見えてきたのは、切明さんが、戦中の「軍国少女」から、いわば「戦後民主主義の申し子」へと新生して行く様子である。一方では占領改革によるアメリカ的民主主義に感銘を受け、それを吸収するとともに、

²⁸ 聞き取り⑤

²⁹ 聞き取り⑤

³⁰ 聞き取り⑤

³¹ 原爆被災資料広島研究会編集委員会編、原爆被災資料広島研究会発行。1969年に第1集が刊行され、第2集は1970年、第3集は1972年、第4集は少し飛んで1984年に刊行されている。東方出版は事務局であったが、印刷は別の会社が行っている。なお東方出版に事務局があったのは第3集までで、切明さんが関わったのも第3集までであった。第4集は田原伯氏が主導して発行したとのことで、第4集のみ編者が「原爆被災資料広島研究会編集部、ピカ資料研究所編」となっている。

³² 第1集巻末の会員名簿には50名弱の名前が連なっている。なお切明悟さんも会員だったが、切明千枝子さんは名簿には名前がない。

³³ 2021年11月2日、切明さんのご自宅にて筆者による聞き取り調査を実施。

もう一方では戦前からの反戦・平和活動家との交流によって戦前・戦中を批判し、「上から」でない「下から」の民主主義の重要さにも眼を啓かれていった様子も見て取れる。このような戦後の諸経験が、現在の切明さんの戦争体験・原爆体験の語りの淵源にあると言えるだろう。

5. おわりに

以上、切明千枝子さんの講演をより深く読み込むため、筆者の行った彼女への聞き取り記録も踏まえ、彼女の思想とその背景にある個人史とを描き、検討してきた。戦中の「軍国少女」は、どのように戦争と原爆を体験したのか。反戦・平和さらには広島「加害」性への反省はどこから得られたのか。本稿の叙述で、そのことの大略は示せたように思われるが、本稿を閉じるにあたって、あらためて整理しておこう。

切明さんの戦争体験・原爆体験とその語り、思想を理解する上で、その個人史的背景が重要であり、本稿ではそれを大きく三つに分けて整理してきた。第一は、生まれてから敗戦にいたる時期である。切明さんのこども時代は15年戦争とほぼ重なり、人生そのものが戦争体験であったとも言える。この時期の話は、主に「軍都」広島と「加害」性に関わる話として語られる。本講演「被害、加害、そして平和」でも彼女が多くの時間を割いて語ったのはこの話題であった。この場合取り上げられたのは、出征兵士に対する積極的な（中国・朝鮮への蔑視を含んだ）送り出し、「お国のために」を実体験した陸軍の三廠における学徒動員、そして戦争と動物（軍馬をはじめとする軍用動物）といった体験である。

第二は原爆被爆直後の時期である。被爆者としての彼女にとって、この体験は15年戦争の全般的な体験とひとまず分けて把握することができる。ここで重要なのは、切明さん自身が原爆の直接被爆を受けた被爆者であり、重篤な原爆症を生き抜いた体験を持ちながらも、それよりも先に優先して語るのが第二県女の後輩たちの被爆体験であったということである。ここでは、名前は出されないが明確な具体的個人の悲惨と死に対する応答行為として彼女の原爆被爆体験の語りが存在するという点に注目する必要があるだろう（これに対して「軍都」広島の「加害」性は、理念としては強く切明さんを捉え、課題化されているが、具体的な個人への応答ではなく、倫理的な責任から導かれた面が強い）。

第三は戦後時代である。この時代は切明さんが青年から成人へと向かう時期でもあり、こども時代に対し、より自覚的に自己の思想的な主体形成をしていく時期でもあった。この時期は、①広島女専時代、②広島県教育委員会時代、③東方出版時代の三つに大きく分けることができる。①の時代に切明さんの思想形成に大きな役割を果たしたのは各種サークル活動であり、中井正一、山代巴、峠三吉といった戦前からの「反戦主義者・平和主義者」の思想や実践に接したことで、戦中の自分が「軍国主義」にすっかり染まっていたことに対する恐ろしさを認識するに至った。そして、「広島がこんな酷い目にあったと思っているけど、それに相応するような、加害者であった日本というものを、ほんとに、痛烈に思った」。これはその後の「軍都」広島の「加害」性を捉える上での大きな転換であった。②の時代で重要だったのは占領改革としてのアメリカの民主主義であり、とくに男女平等、こどもの人権であった。ただし山代巴の指摘した「上からの」民主主義への戸惑い、疑念も同時に抱いていた。③の時代は、夫の悟さんと共にこどものための教育図書の出版を手掛け、軍国主義の教育を受けた自分たちの反省から、反戦・平和主義のこどもの教育について考えるようになる。さらに反戦教育にとどまらず、「本当の平和」は、「差別もなくす、ということが大事」という思想に至る。切明さんは、戦後において「民主主義の申し子」とでも言うべき主体を形成して行った。

以上の三つの時期を通じた切明さんの語りは、「こども」という観点を導き入れることで、一つのつながりを見つけることができるだろう。戦争がもたらすこどもの精神に対する影響、原爆という惨い直接的な体験は、15年戦争しか知らないこどもであった切明さんの実体験であった。戦後、彼女は、戦前日本とは全く異なるこどもを大切にする社会文化の存在を知ったことで、批判的・反省的に自らの戦争体験を、さらには戦前から引き続く日本社会を捉える観点を獲得した。そして彼女は、90歳を超えた現在も、こどもを悲慘に巻き込む戦争に反対するため、反戦と平和について語りつづけている。

以上のように眺め直すと、切明さんが、外的な理論を頭で理解しようとしただけでなく、自分の体験に根差して、反省的に平和の主体を形成し、反戦・平和のための行動に取り組んでいることが分かる。鶴見俊輔は、1968年に刊行された『平和の思想』の「解説」で、「[世界の大勢からときおこすような]情勢分析にもとづく平和論よりも平和の思想としてたよりになるのは、戦争についての自分の反対の意志から出発して、自分の見聞を分析して自分なりの情勢把握をつくり、この情勢把握にもとづいて自分の反戦（あるいは厭戦）の行動（あるいは無行動）の計画を立てるという流儀の考え方」³⁴にこそあるのではないかと戦後の民衆の平和思想に期待しているが、これはまさに切明さんに当てはまる。鶴見俊輔は、戦後日本で、自らの戦争体験を批判的に受け止め、平和の思想を鍛え、平和の主体を形成することについて積極的に発言し、実践した人物である。このような面からも、切明さんはまさに「戦後民主主義」的思想を実践し、ある意味で「体现」してきた人物であったと捉えることができるのである。戦後日本における民衆思想や民衆運動の側面からも、切明千枝子さんの個人史と思想から、わたしたちが汲み取るべき点は多く存在するのである。

《付記：近現代広島において「女性」であるということ》

本文では講演内容に即してその内容を深めることに重点を置いて検討してきた。そのため重要と思われる論点でも割愛せざるを得なかった部分がある。その一つが「女性（であること）」をめぐる困難である。この点のみ付記したい。

「女性」であること、それは筆者と切明さんをつなぐ重要な点である。それは、女性の被爆者の証言を女性の研究者が聞き取るという作業の中で見えてきたこと、ということができるだろうか。切明さんは戦中の広島を語るとき、幾度も女性が差別を受けてきた点を証言した。例えば、戦中に切明さんの母は、こども4人がすべて女兒であることに対して「女腹」や「非国民」という非難の言葉を受けていた。幼い切明さんは「同じ命なのに、どうしてそのような言葉を受けなければならないのか」納得ができなかった。母はそんな切明さんをなだめるように「男の子だって、お母さんから生まれてくるのにね。なんでこんなことを言われるんだろうね」とそっと話してくれたという。また、切明さんは戦前は「そもそも女性には選挙権がなかったですからね!」と大きな声で話したこともあった。教育の分野でも、広島文理科大学も広島高等師範学校には男子しか進学できない。原爆の際、手の尽くしようがなく死んでいく同級生や下級生を見て、医者がいてくれればと願った切明さんは「医者になろう!」と強く決意したが、そのための道は女子医学専門学校しかなく、それも広島にはなかった。教育や職業において女性は男性に比べて著しく機会を制限されていた。筆者が切明さんと初めてお会いして、名刺を差し上げた時から、女性である筆者が大学の教員として研究に取り組んでいる姿を、何か特別な眼差しで観ている様子を感じていた。「いまだに男性社会ではあると思いますが、頑張ってください」との切明さんの言葉は、女性への不当な扱いを身に染みて感じてきた世代からの筆者に対する強い激励であった。

³⁴ 鶴見俊輔編『戦後日本思想大系4 平和の思想』（筑摩書房、1968年）15頁。

切明さんへの聞き取りの中には、女性研究者であっても質問しづらい（男性研究者ではおそらくさらに困難な）内容もあった。その一つは、戦中から被爆ごろにかけての月経の手当てについてである。意外にもと言うべきか、切明さんの回答にはためらいがなかった。「原爆のショックだったのか、原爆のあとで初めて初潮があった」。筆者が現在の一般的な時期より少し遅かったことにふれると、「遅かったんです。栄養が足りなかったんだと思いますよ」という答えであった。戦争末期は特に食べ物がなく、骨と皮だけで栄養失調であったという。当時は、今でいうナプキンがないため、母が「T字帯をつくることを教えてくれた」。さらしの布で作るのが一般的であったが手に入らず、浴衣の古着を加工してT字帯を作ったという。また、トイレで使っていた厚手のちり紙を「ぐしゃぐしゃと丸めて、落とし紙」にして、その上に「今のティッシュとはまた少し違う和紙のようなちり紙」をかぶせて生理時に使用していた。それがナプキン代わりであった。月経は毎月ちゃんときていたのか、さらに尋ねると、「原爆のあと、すぐに初潮があってからは、一年くらいありませんでした」とのことで、母が心配し、産婦人科医の先生に尋ねたという。医師の答えは、「まだ発育が悪いからだろうと。もう少し発育が良くなって、ホルモンが回るようになったら、心配することはない」とのことで、その話を母から聞いて安堵した。現在に比べて格段に生理を話題にできる環境ではなかったが、「母が気にかけて、聞いてくれたので話すことができました」。切明さんの同級生でも月経で悩んでいた女学生は多かった。原爆の後から月経の量が極端に多くなったと心配する友人もいれば、生理不順に陥ったり、「生理がこない」と悩む友人もいた。さらに「乙女たちを困らせた」のは戦後の紙不足であった。「ナプキン替わりにするものを調達するのが大変」だったのである。煙井家で古紙を手に入れることができたとき、同級生に配ってあげたら、みんなが喜び、生理用品に役立てたという。今でも「あの時は助かった」とお礼を言われたりする。「乙女ならではのエピソードですね」と切明さんは苦笑した。当初、筆者は、原爆以前に初潮を迎えており、戦中は毎月が相当の負担であったのではないかと想像していた。切明さんの率直な回答は、予想とは少し違うものであったが、予想を超えて具体的な姿を知ることができた。原爆被爆時、広島市内の徴兵年齢男性の多くは出征して市内におらず、第二総軍をはじめとする在広部隊の兵士を除けば、原爆被害が多かったのは女性や子どもである。原爆体験記や「市民が描いた原爆の絵」にも多くの女性が記録を残している。被爆体験の証言活動においても女性被爆者が活躍している。にもかかわらず、「ヒロシマ」を巡る言説空間において、女性が社会的に抱えこまされていた問題について正面切って議論され、発表されることは極端に少ない。この意味で、広島原爆をめぐる言論状況は「男性」的な偏りが顕著である、あるいは「女性」的視角を大きく欠いている。

切明さんとのこの対話は、聞き取りの中のごく一部に過ぎない。切明さんの個人史から広島歴史に接近しようとするとき、近現代広島において「女性」であることの意味あるいはその困難にふれることを回避することはできないだろう。本稿ではその点についてほとんどふれることができなかった。筆者にとって、今後の大きな課題である。（付記での切明さんの発言はすべて2017年6月16日の聞き取り記録による。）

【謝辞】

切明千枝子さんは、およそ10年間にわたり筆者と忍耐強く「対話」を続けてくださいました。また、コロナ禍になり直接お会いできる機会が急激に減るなかでも、毎週のように快く電話で応対してくださいました。厚く御礼申し上げます。今や切明さんは、研究という世界を超えて、私の人生にとって掛け替えのない存在です。

また、切明さんの膨大な聞き取りの記録を前に立ちすくむ筆者は、親友であり研究者の先輩である福島行さんから終始貴重なご指導を賜りました。福島さんのご支援と励ましくしては、本稿は成立しませんでした。ここに深謝の意を表します。